

キウイフルーツの結果母枝の充実による着花率の向上と花腐細菌病の発生防止

[要約] キウイフルーツの着花枝率は早期落葉や枝の遅伸びを防止し、結果母枝の充実を図ると高い。また、充実した結果母枝に着花した花は花腐細菌病の発病率が低い。

長崎県果樹試験場・落葉果樹科

専門

栽培

対象

キウイフルーツ

分類

指導

平成5年度果樹試験場業務報告

[背景・ねらい]

キウイフルーツは結果母枝の充実度が翌年の着花枝率や花腐細菌病の発生に影響するとされている。そこで、結果母枝の充実度と関係の深い落葉時期（摘葉時期）や結果母枝の遅伸び程度（枝伸長度）と翌年の着花枝率、花腐細菌病の発病率との関係を検討した。

[成果の内容・特徴]

- ①摘葉時期が早いほど結果母枝の澱粉含量が低く充実不良となり、着花枝率も低い。花腐細菌病の発病率は摘葉時期が早いほど高い。7月と10月の2回摘葉区は全く着花せず、結果母枝の澱粉含量も低く、充実も悪い。
- ②4月上旬に発芽した発育枝は6月上旬に発芽した徒長枝に比べ、翌年の着花枝率が高く、花腐細菌病の発病率が低い。7月下旬までに伸長を停止した枝は7月以降も伸長を続けた枝に比べ、翌年の花腐細菌病の発病率が低い。
- ③ねん枝+棚づけ+摘心区の結果母枝は処理後の枝伸長が最も短く、翌年の着花枝率が高く、花腐細菌病の発病率が低い。結果母枝の伸長度と翌年の花腐細菌病の発病率と相関を、着花枝率と逆相関を示す。

[成果の活用面・留意点]

- ①7月下旬以降の環状剥皮処理は花腐細菌病の発生防止に効果が無く、樹勢低下を招くので7月中旬までに実施する。

[具体的データ]

表1 キウイフルーツの夏季における摘葉時期が着花及び花腐細菌病の発病に及ぼす影響

摘葉時期 (月・日)	着花枝率 (%)	1結果枝当たり花数 (個)	結果母枝の澱粉含量 (%)	発病率 (%)
7.30	24.0	2.5	6.3	37.4
9.1	73.5	3.8	7.0	34.0
10.3	81.0	4.2	7.1	30.5
7.30+10.3	0	0	5.5	0
無摘葉	80.3	4.8	7.4	28.3

表2 キウイフルーツの結果母枝の発芽時期と着花枝率及び花腐細菌病の発病

発芽時期	着花枝率 (%)	1結果枝の着花数 (個)	発病率 (%)
4月上旬	87.6	4.2	19.6
6月上旬	86.4	3.3	31.4

表3 キウイフルーツの結果母枝の生育状況と枝伸長度と花腐細菌病の発病

生育状況	枝伸長度 ^z	発病率 (%)
伸長途上枝	102.0	32.6
伸長停止枝	2.5	10.7

^z 1992年 7月30日, 12月23日に枝長を測定しその差で示した

表4 キウイフルーツの結果母枝の各種処理と処理後の枝伸長度, 着花枝率及び花腐細菌病の発病

処 理	枝伸長度 ^z	着花枝率 (%)	発病率(自然) (%)	発病率(接種) (%)
ねん枝+棚づけ	20.4	90.7	11.6	56.7
ねん枝+棚づけ+摘心	15.0	91.4	7.4	46.7
摘心+棚づけ	35.5	89.9	15.4	76.7
棚づけ	48.0	82.3	19.8	100.0
環状剥皮	17.4	91.0	9.8	50.0
無処理	102.0	80.4	28.3	100.0

^z 処理時と12月21日に枝長を測定し, その差で示した。

[その他]

研究課題名: 落葉果樹(ナシ・キウイフルーツ)の高品質果実生産手法の確立試験

予算区分: 県単

研究期間: 平成5年(平成元年~6年)

研究担当者: 森田 昭・林田誠剛

既発表論文等: 平成4年度長崎県果樹試験場業務報告

残された問題点: 組立試験の実証が必要である。